

《論文》

## 『クレイドウ・ザ・スカイ』の語り手は誰か

## ——森博嗣「スカイ・クロラ」シリーズの時系列分析から

松本 佳純 MATSUMOTO, Kasumi

## 【1. はじめに】

森博嗣著『スカイ・クロラ』(二〇〇一)、『ナ・バ・テア』(二〇〇四)、『ダウン・ツ・ヘヴン』(二〇〇五)、『フラッタ・リンツ・ライフ』(二〇〇六)、『クレイドウ・ザ・スカイ』(二〇〇七)、『スカイ・イクリプス』(二〇〇八)で描かれるのは、平和を実感するために「シヨールとしての戦争」を企業が提供する世界だ。ここでは「キルドレ」という大人へと成長しない人間が戦闘機のパイロットとして戦争に関わっていく、彼／彼女らが各作品の語り手となっている。「キルドレ」は病気で死ぬ確率が限りなく低いため、戦死しない限りは永遠に生き続ける。それゆえアイデンティティの喪失という問題に突き当たり、自分は何者であるのかと自問自答する描写が多々見られる。特に『クレイドウ・ザ・スカイ』では語り手が自分の名前すら思い出せず、最後まで語り手が明かされない。これらの作品は総称して「スカイ・クロラ」シリーズと呼ばれるが、『スカイ・イクリプス』のみ短編集である。『スカイ・イクリプス』に収められている短編と区別するために、ここでは他の五巻は長編と呼ぶ。なお、長編の章の並びは時系列順であるが、短編は時系列順に並んでいない。『ス

カイ・イクリプス』巻末に収められている杉江松恋氏の「解説」(森博嗣『スカイ・イクリプス』中央公論新社、二〇〇九)では、『スカイ・イクリプス』所収「ジャイロスコープ」、「ナイン・ライプス」、「スピッツ・ファイア」、「ハート・ドレイン」、「アース・ボーン」の時間軸に言及がある。また高倉茉莉子氏は、「森博嗣(スカイ・クロラ)の人格デバイス——死は物語を離脱するのか<sup>(2)</sup>」(『筑紫語文』二〇〇九・一〇)において、長編の時間軸上はどこに短編の時間軸が設定されているか、作品本文から根拠を導き時系列の整理を行なった。

本稿では作品本文を検討し、時系列の再整理および長編で唯一語り手が明示されていない『クレイドウ・ザ・スカイ』の語り手は誰なのかという疑問を解決したい。

まず「スカイ・クロラ」シリーズの時系列を整理し、概要をまとめることで『クレイドウ・ザ・スカイ』の前後ではどのようなことが起こっているのかを明らかにする。次に作品本文から『クレイドウ・ザ・スカイ』の語り手が誰なのか考察する。以上の方法で論を進めていきたい。

## 【2・時系列の整理】

長編の時系列が『ナ・バ・テア』、『ダウン・ツ・ヘヴン』、『フラッタ・リンツ・ライフ』、『クレイドウ・ザ・スカイ』、『スカイ・クロラ』の順に並んでいることは、高倉氏の行った「クサナギ・ミズキ」の年齢を指標とする考察結果に同意し、確定しているものと考えられる。その上で、ここでは短編の時間軸がどこに設定されているかということを再度検討したい。高倉・杉江両氏の研究をもとに、新たに論拠となると思われる部分があればそれを加えて時系列の整理を行った。以下は時系列順に長編と短編を並べ替え、梗概を付したものである。（以下、順番は丸囲み数字で示し、確定の難しいものも仮に組み込んだ。）

## ①「ハート・ドレイン」(『スカイ・イクリプス』)

この話の中心となるのは「クサナギ」たちが勤める会社の情報部に所属する「カイ」である。ある男性パイロットが市街地で墜落事故を起こした際に、それが平和を守るための戦いだったと印象付けるための情報操作を行った。世間の感情をコントロールするため、女性パイロットの「クサナギ」が事故を起こしたことになっている。

時間軸を特定出来る根拠となるのは、「カイ」と「クサナギ」の初対面のエピソードであるため『ナ・バ・テア』以前の出来事であることと、「クサナギ」が西部の基地に異動する前の話で、彼女が少尉であるのは『ナ・バ・テア』までであることだ。

## ②『ナ・バ・テア』プロローグ第三話

語り手は「クサナギ」で、彼女は「ティーチャ」と呼ばれる腕の立つパイロットが居る基地に配属される。「ティーチャ」は「キルドレ」では

なく大人の男性だ。大きなプロジェクトのあとには「比嘉澤」と「栗田」もこの基地に配属になった。他のパイロットと同様に「クサナギ」も「ティーチャ」に憧れている。「比嘉澤」の随った夜、娼婦の「フーコ」に会いに行くという「ティーチャ」に同行した「クサナギ」は、「ティーチャ」と夜を共にした。

## ③「ジャイロスコープ」(『スカイ・イクリプス』)

この話では整備工の「サクラ」が中心になっており、彼は「クサナギ」の飛行機を改造することに精を出している。あるとき「クサナギ」は宣伝用の写真を撮られることになった。

時間軸を特定する根拠としては、『ナ・バ・テア』第四話の一に

笹倉は、エンジンの改造に余念がない。整備をしているとき以外は、ずっととにかくの実験をしている様子だった。地上でできる実験は、しかし知れている。最終的にはどうしても実機で試す必要があるだろう。そうなったときに、どうするつもりなのか。僕は彼の実験台になるのはご免だ。

という部分があるので、そのころの話と考えられることがある。なお「ジャイロスコープ」では以下のような「サクラ」と「クサナギ」の会話があることを確認した。

「べつに、怒ったりしないから」クサナギは、口もとを僅かに緩めた。一瞬だったので、見間違いだっただかもしれない。「でも、黙って交換されるのは、ちよつと嫌だな」

「わかった、報告するよ」

「今までにも、こういうことが？」

「ああ……」ササクラは頷いた。

「実験台つてわけだ。」クサナギが顔を傾ける。眉が上がったただけで、表情は変わらない。

「否定はしない。でも、絶対に自信があることしかやらない。本当に実験が必要なものつていうのは、もっと複雑なものだ」

高倉氏は、「クサナギ」が企業広報に利用され始めるのは『ナ・バ・テア』第三話の九からであり、そこから上官となり広報活動が少なくなる『フラッタ・リンツ・ライフ』までの間に位置する短編（ちりばめ）として、第三話の九に広報活動を始めたこととれる記述はなかった。『ナ・バ・テア』で「クサナギ」の広報活動が描かれるのは第四話からである。「ジャイロスコープ」の時間軸に関して私がさらに根拠として挙げたいのは、以下の作品本文中に書かれている時間経過の表記だ。

さきほどの歓迎会には、ティーチャは出席していなかった。そういえば、先週以来、彼とのフライトはない。

『ナ・バ・テア』第三話の二

ここで「比嘉澤」と「栗田」の歓迎会が行われたことが分かり、(翌週には、新人二人と一緒に飛ぶことになった。)『ナ・バ・テア』第三話の三)と時間の経過が明示される。この任務から帰ってきた後、次のような会話が書かれている。

「散香は、順次改造になるらしいです」比嘉澤は言う。「私のは三週間後だつて言われました」

「へえ、どれぐらいかかるつて？」ササクラがきく。

「三日間」

『ナ・バ・テア』第三話の三)

しかし第三話中で「比嘉澤」は戦死し、続く『ナ・バ・テア』第四話の冒頭は以下の通りだ。

比嘉澤の代わりに、栗田の散香が改造を受けた。その後、新型の散香がもう一機、基地へやってきた。

「比嘉澤」の飛行機を改造する予定だった時期に「栗田」の飛行機が改造を受けたのだとすれば、歓迎会の翌週からさらに三週間後ということになる。歓迎会の翌週が具体的に何日後か特定するのは難しいが、最大で一週間だと推測できる。そして、「ジャイロスコープ」には以下の記述がみられた。

「このまえの話の続きだけれど」クサナギが近くまで来て、話しかけてきた。「失速する寸前にエレベータを引くと、左ラダーへ取られるのは、機体の癖ではないつて、言ったよね？」

「いつの話の続き？」ササクラはきいた。いきなりのコアな話題だったので、少なからず驚きつつ。「そんな話、したかなあ」

「このまえ、パーティーのとき。もっと詳しく聞きたかつたけれど、ほかのテーブルから呼ばれて……」

「ああ、三週間くらいいまいじゃないか」彼は可笑しかったので笑った。

ここで「パーティー」が先述の歓迎会だとすると、「栗田」の飛行機が改造されるまでの約三週間という時間の経過にほぼ合致する。このことも併せて、「ジャイロスコープ」は『ナ・バ・テア』第三話と第四話の間に位置する作品だと考えられる。

#### ④『ナ・バ・テア』第四話『エピソード』

「クサナギ」は次第に宣伝活動が増えていく。パイロットとしての腕も上がり、「ティーチャ」を抜いて基地で撃墜数がトップになった。そんな中、「ティーチャ」との子どもを孕んでいることが分かり墮胎しようとするが、医師から「キルドレ」である彼女の子どもは墮胎手術で摘出されても生かすことができるかと告げられる。それを拒む「クサナギ」だが、「ティーチャ」は子どもを生かすことを望んでいた。子どもを引き取った「ティーチャ」は会社を辞め、「クサナギ」はショックを受ける。しかし空の上で、敵として再び「ティーチャ」に出会った。

#### ⑤「ナイン・ライブス」『スカイ・イクリプス』

「ティーチャ」を中心とする話である。彼は「クサナギ」との子どもの世話を同棲している女性に任せ、パイロットとして働いている。

時間軸の特定については、「クサナギ」との子どもと思われる乳児が登場すること、「ティーチャ」と「クサナギ」が敵対する企業で仕事をしていることから『ナ・バ・テア』のエピソードより後の話だと考えられ、さらに学校に通うようになった「クサナギ・ミズキ」が『フラッター・リ

ンツ・ライブ』に登場することから、それ以前の話だと考える。

ここで、「ナイン・ライブス」の時間軸が『フラッター・リンツ・ライブ』以前だと言うために、「ティーチャ」と「クサナギ」の子どもが「クサナギ・ミズキ」であると証明する必要が出てきた。『スカイ・クロラ』で「クサナギ」は「ミズキ」を自分の妹だと明言しており、「ミズキ」も「クサナギ」を「お姉様」と呼んでいるからだ。しかし以下の「クサナギ」の語りに注目したい。

兄弟というものが僕にはいないから、理解ができないのかもしれないな、とも考えた。血がつながった者といえ、母しか思い浮かばない。

一瞬、息を止めた。

それから、もう一人いる。

どこにいるだろう。

生きているのだろうか。

『ダウン・ツ・ヘヴン』第三話の一

傍線部から、「クサナギ」にとって母親以外の血縁者は「ティーチャ」との間にできた子どもだと推測される。婚姻を結んだ相手がいなくてもかわらず娘がいるというのを周囲に知られないために、妹だということにしているという可能性が考えられる。現に『スカイ・クロラ』では、「ミズキ」が妹ではなく娘だという噂も立っており、パイロットの間ではそれが事実であるかのように受け入れられている。このことから「ミズキ」は「ティーチャ」と「クサナギ」の娘であると考えられる。「ティーチャ」に生まれたばかりの子どもがいるため『ナ・バ・テア』の後日譚のように

も読めるといふことから、『ナ・バ・テア』のエピローグのすぐ後にくる話だと位置づけたい。

### ⑥『ダウン・ツ・ヘヴン』

語り手は「クサナギ」である。怪我をした彼女は入院先の病院で「カンナミ」という少年に会う。彼もパイロットで、随ちて入院しているらしいが記憶が曖昧だった。退院後「クサナギ」は講習会の講師に呼ばれ、その講習会には「カンナミ」も出席していた。次の任務は市街地の低空で戦闘をするというもので、相手は「ティーチャ」だ。死ぬかもしれないことを強く意識し、一方で「ティーチャ」と戦えることを嬉しく感じた。しかしパフォーマンズとしてのこの戦闘では実弾が使われておらず、それに対して「クサナギ」は強く反発を見せた。

### ⑦『ワニング・ムーン』（『スカイ・イクリプス』）

海の上に不時着したパイロットが、偶然通りかかった貨物船に助けられる話である。よく似た話が『スカイ・クロラ』で「カンナミ」の口から語られるが、食い違っている箇所もあるため同一の出来事とは断定できない。しかしながら「キルドレ」は記憶が曖昧であるという設定があるので、このパイロットを「カンナミ」だと仮定し、「ワニング・ムーン」の時間軸を『スカイ・クロラ』より前だとしておきたい。『スカイ・クロラ』第二話の七で「カンナミ」のパイロット歴が五年、第三話の七で時間経過の指標となる「クサナギ・ミズキ」の年齢が十歳くらいであると述べられている。よって、「ナイン・ライブス」より後、『スカイ・クロラ』より前の時間の話だと考えられる。さらには、『ダウン・ツ・ヘヴン』で描かれる「カンナミ」は落ちる以前の記憶がほとんどないため、『スカ

イ・クロラ』で過去を語っているということを考慮し、『ダウン・ツ・ヘヴン』より後と位置付けておく。ただし、『ダウン・ツ・ヘヴン』から『スカイ・クロラ』のどこに入るかは正確には確定できない。

### ⑧『フラッタ・リンツ・ライフ』

語り手は「クリタ」である。

「でも、もうかなり長く、クサナギ大尉とご一緒だそうですね」

「ずっと同じチームです。一緒というか、彼女は僕の上司です」

「大尉が指揮官になって、こちらの基地へいらつしやったとき、クリタさんだけが、一緒に転属されたそうじゃないですか」

「ええ。あと、整備士も二名」

（『フラッタ・リンツ・ライフ』第一話の七）

という記述があることから、「クリタ」は『ナ・バ・テア』で登場した「栗田」と同一人物だと考えられる。昇進した「クサナギ」が指揮する部隊に所属し、敵を墮とした日には「フーコ」のもとへ行く。「サガラ」という研究者から「キルドレ」を普通の人間に戻す方法があると聞かされ、その実証例が「クサナギ」だと知った。「クサナギ」が母親の葬儀に行く際に同行し、そこで彼女の命を狙った「サガラ」に撃たれ入院する。退院後は療養施設での生活を経て大きなプロジェクトに参加するが、「ティーチャ」と思われる敵に墮とされ再度入院した。入院中の場面に

草薙も、いつまでもは飛べないだろう。あぁなつてしまったのだから、それは必至。だけど、大丈夫、安全な生活がきつと彼女を優

しく待っている。(中略) そう、きっと。  
けれども……、

一つだけ不安はある。今の僕が、本当に僕なのか、ということだ。  
ほんの少しだけ、僕の一部が警告し続けていた。

『フラッタ・リンツ・ライフ』第四話の一)

という記述があることから、「クリタ」は今の自分が今までの自分と同じなのか疑問視していると思われる。

### ⑨ 『クレイドウ・ザ・スカイ』

語り手は明示されていないが、パイロットである。病院から抜け出して「フーコ」と逃げていたが、「サガラ」に連絡をして彼女のもとに身を寄せた。記憶が曖昧で、自分が何者なのか思い出せない。警察と自分の会社という追手から逃れるために「サガラ」と逃走し、戦闘機を操縦して戦うもその実力を見込まれ、結果的にはまた会社で働くことになる。「サガラ」に頼まれ彼女を射殺した。

### ⑩ 『スピッツ・ファイア』(『スカイ・イクリップス』)

パイロットたちがよくコーヒーを飲みにくる店が舞台である。入口にずっと座っている老人には、店の前の道を通る神様が見えるという。老人からその話を聞いた「彼」(パイロット)は、帰り道で車が故障した「クサナギ」と出会い、一緒に基地に帰った。

時間軸の特定の根拠には、シリーズで自分のバイクに乗るパイロットが「トキノ」だけであることから「彼」は「トキノ」だと推測でき、「クサナギ」と「トキノ」の出会い時期を考慮して『クレイドウ・ザ・スカ

イ』から『スカイ・クロラ』の間だと考えられる。なお、『スカイ・クロラ』では

ウエイトレスが行ってしまうのを待って、僕は小声で言った。「ここが、案内すべき店?」

「ここは、ポイント1だ」土岐野は鼻息をもらす。それから、後ろを振り返って店内を一度見回してから、こちらを向いた。「ものごとには手順ってものがあるんだ。外で飲んでいた爺さんを見ただろ?」

「うん。酒を飲んでいた。なんで、中に入らない?」

「あれは、水なんだ」土岐野も煙草を取出した。「もう、水だって酒だって同じってこと。道路を何かが通るってさ、ずっとああして待っている」

「何が通る?」

「さあ……」煙を吐き出してから、土岐野はマッチを灰皿に投げる。

「神様かも」

「幸せな人生だ」僕は微笑んだ。

(『スカイ・クロラ』第一話の五)

という「カンナミ」と「トキノ」の会話が確認できた。「スピッツ・ファイア」の「彼」は老人から道路を通る神様の話を聞いており、「トキノ」は『スカイ・クロラ』で老人が神様を待っていると話している。この点でも「彼」は「トキノ」である可能性が高いと考えた。舞台となっている店は『フラッタ・リンツ・ライフ』と『スカイ・クロラ』に出てくるが、店の前に座っている老人は前者には登場しない。このことから「スピッツ・ファイア」の時間軸は『スカイ・クロラ』に近いと考えられる。

## ⑩『スカイ・クロラ』

語り手は「カンナミ」である。亡くなった「クリタ」の後任として、「クサナギ」の指揮する部隊に異動した。「ササクラ」も登場するが、他の話とは「クサナギ」への態度が違う。呼び方が「クサナギ」ではなく「クサナギ氏」になっており、会話では敬語を使っている。(他では敬語を使っていない。)しばらくして基地を出ることになった。「ミツヤ」などと共に大きなプロジェクトに参加したときには「ティーチャ」に出会う。「クサナギ」は自殺願望が強く、最期は「カンナミ」に射殺された。

「カンナミ」がただの後任者ではないことが以下の場面から推測される。

「でも、クリタさんは死ななかつた」三ツ矢は囁いた。

「どうして？」僕はきく。

「貴方になったから」彼女は下を向いたままだ。「もう一度、再生して、新しい記憶を植え付けて、貴方が作られたのよ。貴方はクリタさんの生まれ替わり」

「どうして、みんなそれに気づかない？」僕は冷静だった。

「そのくらい、変えられるもの。ちよつとした変化で、人の表面なんて変わってしまう。でも、中身はそっくり同じ。そうしないと、クリタさんの持っていたノウハウが失われるから。パイロットとしての、兵器としての性能が失われるから」

(『スカイ・クロラ』第五話の四)

\*

「私も、キルドレなのかしら？ 今、貴方に話したこと自体、私は夢で見たことかもしれないのよ。本当にあったことなのか、単に私

の細胞に埋め込まれた人工記憶なのか。(後略)」

(『スカイ・クロラ』第五話の四)

ここから、「クリタ」のパイロットとしての技術は記憶を移植することで「カンナミ」に受け継がれたと考えられていることが分かる。さらには、他のパイロットも同様に記憶を植え付けられている可能性が示唆された。『クレイドウ・ザ・スカイ』での「僕」と「サガラ」の会話に

「いえ、僕は会社に戻って、また飛行機に乗れるかもしれない。それで、まるく収まりませんか？」

(中略)

「乗れると思う？」

飛行機に乗れるか、という意味だろう。

「それは、わからない。僕は大丈夫だと思っているけれど」

「そのまえに、薬を飲まされて、記憶も消されてしまうでしょう。」

もう、あなたはあなたでなくなるかもしれないのよ。それでも飛行機に乗りたい？」

僕が僕でなくなる？」

しかし、既に今の状態が、それに近いような気がした。

「顔だつて変わってしまうかもしれない」彼女は続けた。「次に会ったときには、もう私だつて、あなただとわからない。あなたも私だとはわからないかもしれない」

僕は黙っていた。

(『クレイドウ・ザ・スカイ』第三話の四)

というものがあることから、「ギルドレ」は記憶を操作され、外見までも変えられる存在だということが窺える。語り手「僕」の実感では、傍線部の通り今の状態が記憶を操作され自分が自分でないようだということだった。

⑫ 『ドール・グローリー』（『スカイ・イクリプス』）

大人になって音楽の先生として働く「クサナギ・ミズキ」が、入院中の「カンナミ」に会いに行く話である。「カンナミ」が退院してからは、「カイ」に連れられ「カンナミ」の暮らす街にも赴いた。

「クサナギ・ミズキ」の年齢を考えると『スカイ・クロラ』より後の話である。この短編は

鞆を開けて、まずカーデイガンを取り出した。

「へえ……、僕に？」

「まだ、ちょっと暖かいかしら」

「そんなことない」カンナミはそれを受け取って、すぐに腕を通した。

「お姉様のために編んだのよ」

「え？」カンナミがこちらを向く。「お姉さんって？」

「いえ……」彼女はくすくすと笑った。「途中で気が変わったの」

大人になって、簡単に嘘がつけようになつた彼女だった。

（「ドール・グローリー」）

という場面で締めくくられている。ここでの「嘘」は「途中で気が変わったの」と言ったことを指し、すると「お姉様のために編んだのよ」が

真実ということになる。つまり、「ミズキ」は「クサナギ」のために編んだカーデイガンを「カンナミ」に渡しているのだ。「クサナギ」と「カンナミ」を重ね合わせるような振舞いがなされていることが分かる。

「スカイ・アッシュ」との前後関係について、「カイ」が「クサナギ」からたびたび母親のようだと形容されていることをふまえ、（病院を出て、カンナミはこの街へ来たのだ。ここにカイがいるからだだった。）（「ドール・グローリー」という記述と

別の女も、思い浮かぶ。

彼女も母親のようだ。

いつも怒っている目で。

だけど、優しい。

その女が、病院を出るときに迎えにきてくれた。行き先がない自分分を、引き取ってくれたのだ。

（「スカイ・アッシュ」）

という記述から考えてみる。先述の通り「クサナギ」と「カンナミ」は同一視されているが、「ドール・グローリー」では「カンナミ」は退院後に「カイ」が居るという理由で、「この街」で暮らすことになったと書かれている。「スカイ・アッシュ」で「クサナギ」に回想される、自分を引き取ってくれた母親のような女性が「カイ」だという可能性もあると考え、「ドール・グローリー」の時間軸を「スカイ・アッシュ」より前に位置付けておく。ただし、「アース・ボーン」との前後関係は確定できない。

⑬ 「アース・ボーン」（『スカイ・イクリプス』）



パイロットの「マシマ」を中心に書かれている。「フーコ」が娼婦を辞めて店を出すと言い、それは「クサナギ」に金を貰ったことが理由だと噂されている。

時間軸の特定の根拠には、「フーコ」がまだ娼婦をしていた『スカイ・クロラ』より後、「フーコ」が店を出す「スカイ・アッシュ」より前だということが挙げられる。

⑭ 「スカイ・アッシュ」(『スカイ・イクリプス』)

女性の元パイロットが、レンタカーで「フーコ」の店へと向かう。「フーコ」と再会し、二人で遠くの街に行ったことなどを懐かしんだ。

時間軸は、「フーコ」がまだ店を出していない「アース・ポーン」より後だと考えられる。また、登場する元パイロットが誰なのかということについての考察は以下の通りだ。彼女が

夢だったかもしれないけれど、その女が、自分をまた子供に戻した。そして、もう一度、飛行機に乗れるようにしてくれたのだ。その代わり、どんどん記憶が希薄になった。現実を把握できなくなった。大勢の人間の人生が、自分の中に入り込んできた。人から聞いた話、夢で見たこと、映画で見た物語、そんなものが、自分の人生と混練され、常に泡立っていた。

(「スカイ・アッシュ」)

と回想する場面があるが、「ギルドレ」から脱却した経験があるのは「クサナギ」だけである。さらに女性だということからこの元パイロットは「クサナギ」であると考ええる。また、別の場面では次のような記述がみ

られた。

彼女はそこで眠ってしまった。

夢を見た。

人を撃つ夢だった。

一人は女。

暗闇の中で十字を切っていた。

もう一人は男。

ネオンの黄色い光が下から照らしていた。

二人とも、撃つてくれと、頼んだのだ。

彼女は引き金を引いた。

躊躇なく。

(中略)

そう……、

撃つてくれと言った二人は、

そう……、

大好きな二人だった。

空で会おう連中よりも、大切な、

そして尊敬できる、

人だった。

思い出した。

大切な、大切な、大切な。

それを、何故、撃ち殺してしまったのだろう。

理由は分からない。

自分の気持ちよりも、相手の意思を尊重した？

そうか？

そんなことまで考えたか？

待て。

もう一人いたはず。

撃つてくれと言った人が……。

「その銃で、私を撃つて」

「それは命令ですか？」

自分の声で、目が覚めた。

まず、自分を撃つてくれと頼み、殺される前に十字を切った女というのは「サガラ」だと考えられる。『クレイドウ・ザ・スカイ』には

彼女は一度瞬き、僕を見据えて言った。

「一つだけお願いがあります」

「何？」

「私を撃つて」彼女は這いながら、前に出てきた。「銃を持っていく？」

「持っていない」

「じゃあ、この銃で」

「撃てない。君を連れ出すと約束したんだ」

「自分で撃つのは、私の宗教に反します。それで、今までできなかった。お願い。この銃で私の頭を撃つて。そして、その銃を私に握らせて。あなたに迷惑はかからない」

彼女は、僕に銃を手渡した。

彼女は横を向いた。そして小さく十字を切ってから、両手の指を

組み合わせる。

「神の御許に……」

僕は引き金に指を。

そして、力を入れた。

撃つ。

（『クレイドウ・ザ・スカイ』第四話の五）

という場面があるので、「スカイ・アッシュ」における「クサナギ」の夢で回想されるのは「サガラ」の可能性が高いだろう。ただし、前述の通り『クレイドウ・ザ・スカイ』の語り手は誰だか明かされていないため、「サガラ」を撃った「僕」というのが「クサナギ」だとは明言されていない。次に、撃つてくれと頼んだ男について考える。「クサナギ」に撃たれた男に該当するのが「クリタ」であることを、以下の引用から検証したい。まず「サガラ」と新聞記者の「ソマナカ」の会話では

「クリタさんは、亡くなったようです」

「ああ、そうですか」彼女は答えた。

「ご存じでしたか？」

「いいえ」

「これは、噂なのですが、クリタさんは、病院を抜け出した。そして、ある娼婦と一緒に逃げていたのです。けれど、最後には見つかって、撃たれました」

「まさか……、どうして撃たれるんです？ 警察がそんなことをするはずがありません」

「警察が見つけたのではない。彼の上司が見つけた。見つけた

ら、射殺するようにという指令が出ていたらしいです。この場合、あの会社内の処理は、戦場と同様に、法の対象外となります。犯罪にはなりません」

「誰が撃ったのかご存じみたいですね」

「クサナギ大尉が撃ちました。噂と言いましたが、嘘です。私は、これを彼女から直接聞いたのです」

「それを、私に信じると？」

（『クレイドゥ・ザ・スカイ』第二話の七）

と話されている。『スカイ・クロラ』では

「お前、クリタのこと聞いたか？」篠田はまたにやりと笑った。

（中略）

「どんな話？」僕は尋ねる。

「あの女が、撃ったんだ」篠田は言った。

「クサナギ氏が？」僕は身を乗り出した。「クリタさんを？」

篠田は頷く。

（『スカイ・クロラ』第三話の四）

と噂されており、「カンナミ」と「クサナギ」の会話でも

「クリタさんを殺した、という話は？」

「本当」彼女は簡単に頷いた。

「彼が殺してくれと？」

「もちろん」

「彼が好きだった？」

「ええ」

（『スカイ・クロラ』第五話の六）

と、「クリタ」の死について語られている。実際に「クサナギ」が「クリタ」を殺す場面も「クサナギ・ミズキ」が次のように回想しており、事実と考えてよいだろう。

「誰？」女の声が聞こえた。

「クリタに会いにきた」

「誰なの？ あんた」

しばらく沈黙があつて、今度はドアが大きく開き、中から若い男が現れた。彼は外に出て、背中でドアを閉めた。

「よく、ここがわかりましたね」彼は言う。「一人で？」

「どうする？ 私と戻るか？」姉が尋ねた。

「うーん」彼は唸り、それから短い溜息をついた。「いや、駄目だ」僅かに首を振る。「もう、終わりにしましょう」

「どうやって？」

「お願いがあります」彼は言った。そして、小声で囁いた。「ここで僕を撃つて下さい。銃を持っているのでしょう？」

「（？）で？」

「（？）でいい」

「どうして？」

「貴女に撃たれるなんて、幸せだ」

（「ドール・グロリーイ」）

以上から、「クリタ」は「クサナギ」に撃つてくれと頼み、殺されたと考えられる。もう一人の撃つてくれと頼んだ人物は、『スカイ・クロラ』の

「カンナミ」目を瞑ったまま、草薙は言った。「その銃で、私を撃つて」

「それは命令ですか？」

（『スカイ・クロラ』第五話の六）

という場面と会話が一致していることから、「クサナギ」だと思われる。

つまり『スカイ・クロラ』では「クサナギ」が「カンナミ」に撃つてくれと頼んでいるにもかかわらず、「スカイ・アッシュ」では「クサナギ」が自分自身を撃つた記憶としてそれを思い出しているということになる。「クサナギ」と「カンナミ」の記憶が混在していることについては、『クレイドゥ・ザ・スカイ』の語り手を考える際に改めて言及したい。

時系列の整理は以上である。『フラッタ・リンツ・ライフ』では語り手「クリタ」が自分を自分であると認めることに疑問を抱いており、『クレイドゥ・ザ・スカイ』では語り手「僕」は自分が誰なのか分からない。『スカイ・クロラ』では「クリタ」と「カンナミ」の関係が示された。ここまでで、「クリタ」の記憶は「カンナミ」に移植されたこと、「クサナギ」と「カンナミ」が同一の存在として描かれている箇所があることが分かる。

### 【3・『クレイドゥ・ザ・スカイ』の語り手】

ここから『クレイドゥ・ザ・スカイ』の語り手は誰なのかという疑問に向かいたい。高倉氏は他の著作物やウェブログ等での森博嗣の発言に

目を向け、ミームという記憶に関連する概念(concepts)を用いて「スカイ・クロラ」シリーズでは身体が記憶を入れる器のような役割で描かれていることを指摘した。<sup>(1)</sup>『クレイドゥ・ザ・スカイ』の語り手に関して、身体が「クサナギ」で、その「クサナギ」という器に「クサナギ」、「クリタ」、「カンナミ」のミームが入っていると述べている。本稿では、具体的な本文の検討から語り手が誰なのか考えたい。以下に『クレイドゥ・ザ・スカイ』の本文中にみられた記述を考察する。まず、語り手「僕」と「サガラ」の会話である。

「裁判？」

「あなたに銃を向けたことは、その裁判では問われていない。本当の罪は、それなのに。それが一番重いはずなのに……。だから……」  
彼女はそこで言葉に詰まった。片手を口もとに持っていった。

（『クレイドゥ・ザ・スカイ』第一話の六）

「サガラ」に銃を向けられたことがあるのは「クサナギ」と「クリタ」だ。ただし、発砲されたのは「クリタ」のみである。病院から逃走していた語り手「僕」がたどり着いた防空壕の場面では

「その判断が間違いだとは言わない」それを言った男は、スプーンを掬ったスプーンを口へ運び、飲み込みながら、僕の方を一瞥した。「殺しにくるのか？ それとも、大事な兵器を取り戻したいのか？」

（中略）

大事な兵器を取り戻しに来る？  
散香のことだろうか。

そうじゃない、あの男の目でわかる。  
僕のことだ。

〔『クレイドウ・ザ・スカイ』第四話の三〕

という描写がある。「大事な兵器」と呼ばれるほどパイロットとしての戦闘能力が高いというのは、「兵器」と形容されたことのある「クサナギ」「クリタ」が挙げられるが、「クリタ」の技術を移植されたと考えられる「カンナミ」が該当しないとは言い切れない。自殺しようとする「サガラ」と「僕」の会話では

「どうして、死ぬの？」僕は聞いた。

「利用される。私の知識が」

僕は黙った。反論することはできない、と思った。

「あなたは、キルドレに戻った。その理由は、私しか知らない」

「戻った？」

「寝ている間に、検査をしたの」

〔『クレイドウ・ザ・スカイ』第四話の五〕

と述べられている。「キルドレ」から普通の人間になり、再び「キルドレ」に戻った経験があるのは、「クサナギ」のみである。高倉氏は傍線部の発言から、妊娠により一旦「キルドレ」ではなくなり、再び「キルドレ」に戻った人物は「クサナギ・スイト」のみだとして、少なくとも体は彼女のものだ<sup>(1)</sup>と述べている。なお、ここで話題になっている注射とは以下の場面のものである。

彼女は指を自分の口に一度当て、それから、ポケットから小さな注射器を取り出した。

「これで、願いが叶うわ」小声で言った。

その注射器が僕の手首に刺さった。

〔『クレイドウ・ザ・スカイ』第一話の六〕

しかしながら新聞記者「ソマナカ」と「サガラ」の会話では

「このまえの大きな戦闘で、クサナギ大尉が亡くなったと聞かれて、どう思いましたか？」

「いえ、私はそのとき、警察に拘束されていて、その情報を知らずにいました。一ヶ月くらいあとです、聞いたのは」

僕は驚いていた。

〔『クレイドウ・ザ・スカイ』第二話の七〕

と、既に「クサナギ」が戦死しているということが明かされる。「ソマナカ」と「僕」（「カンナミ」と呼ばれている）の会話では亡くなったという「クサナギ」について

「私は、クサナギ・スイトをずっと追っていました。あ、つまり、取材をしていたのです」

「その人は、死んだのですか？」

「そう聞いていました。でも、半年ほど前に突然、復帰しました」

「へえ」

「つい先日、スクープがあつて、話題になったでしょう。非武装地

帯であったという……」

「ああ、やっていますね、テレビで」

「あのとき、四機を落としたのが、クサナギ・スイトです」

「え？ あ、じゃあ、味方じゃないのですね」

「あのスクープをしたのが、実はこの私です。私は、彼女が飛ぶところを見ていました。写真も撮りました」

(中略)

「ここへ来るよりも、そのクサナギ・スイトのところへ行ったらどうですか？ 復帰したんでしょう？ どこにいるのか、わかっているのでしょうか？」

「ええ、会ってきました」彼はそう言うと、僕をじっと見つめた。「あの基地の指揮官になっています」

よくわからない、どうして、僕に会いに来たのだろう。似ているというだけで……。

「でも……」彼は、ゆっくりと首を左右にふる。「あれは、別人だ、クサナギ大尉ではない。見たところ、それらしいのですが、まったく別人です」

「へえ……」僕は少し笑ってしまった。あまりに彼が真剣な顔だったからだ。「だから？」

「だから、あなたに会って確かめよう」と

「何をです？」

「あなたの方が、似ています」

「でも、僕は、その人じゃない」

(『クレイドウ・ザ・スカイ』エピソード)

という情報が提示された。「ソマナカ」は「クサナギ」が以前の「クサナギ」とは別人であると述べる。『クレイドウ・ザ・スカイ』に続く『スカイ・クロラ』での、「サスクラ」の「クサナギ」への態度でも以前とは違う関係になったことが窺え、「クサナギ」の変化が推測される。ここでは語り手「僕」が「カンナミ」と呼ばれていることも重要である。医師「ハヤセ」が「僕」に質問する場面では次のようなやりとりがある。

「名前は？」

「名前。僕の、名前ですか？」

「もちろん」

「思い出せません」

「自分の名前が思い出せない？」

「はい」

「では、彼女の名前は？」彼は、僕の隣の彼女の方へ片手を示す。

「サガラさんです」

「それは、さっき、僕が口にしたからね。下の名前は？」

「アオイさんです」

「それは、思い出せる」

「思い出しました」

「ほかに、誰か、人の名前を言えるかな？ 君の知っている人、誰でもいいよ」

僕は考えた。最初に頭に浮かんだのは、白い肌の女だった。

「フーコ」僕は答える。

「フーコ」彼は言葉を繰り返した。

(中略)

「ほかに、名前が思い出せる人はいる？」

「えっと、クサナギ・スイト」

「ああ、そうか。有名だからね」

「有名ですか？」

「いや、僕でも知っている」彼は微笑んだ。「もしかして、知り合い？」

「いえ、覚えていません。飛行機で飛んでいるとき以外のことは、ほとんど記憶がありません」

（『クレイドゥ・ザ・スカイ』第三話の二）

他に思い出せた人物は「クリタ・ジンロウ」、「カンナミ・ユーヒチ」、「ティーチャ」、「ササクラ」だった。記憶が曖昧にも関わらず思い出せているため、「僕」はこれらの人物と関わりが深いと思われる。「サガラ」、「フーコ」、「クサナギ」、「クリタ」、「カンナミ」、「ティーチャ」、「ササクラ」を知っているという点では、『クレイドゥ・ザ・スカイ』の時点で該当者がいない。「クサナギ」が戦死しているため、一見語り手の候補を「クリタ」と「カンナミ」に絞ることもできそうだが、「ティーチャ」の名前があることや、クサナギしか該当しない「僕」の情報があることとは辻褃が合わない。ヒントは「スカイ・アッシュ」にあると考える。「スカイ・アッシュ」では、梗概の通り「クリタ」や「カンナミ」の身に起こったとされる出来事が、「クサナギ」の体験として書かれている。具体的には、『クレイドゥ・ザ・スカイ』で「ソマナカ」は、「クリタ」が病院を抜け出し娼婦と逃げていたと発言するが、「スカイ・アッシュ」では「クサナギ」が「フーコ」との逃走を回想する。また、時系列の整理の際に触れた「カンナミ」と「クサナギ」の記憶が混在していることが挙げられる。

以上の検討をへて、改めて『クレイドゥ・ザ・スカイ』の語り手は誰なのかという疑問に立ち返るが、語り手「僕」は「クサナギ」、「クリタ」、「カンナミ」の三人の記憶の集合となるものだろう。「クサナギ」の記憶が病院を抜け出した後の「クリタ」へ、「クサナギ」の記憶も保有している「クリタ」の記憶が「カンナミ」へと移植される過程だと捉えることができる。よって、語り手「僕」は「クリタ」と「カンナミ」の二人である。「僕」は経験に基づかない記憶を保有しているがゆえに、自分だけが分からなくなっている。

## 注

- (1) 以下、杉江論を参照・引用した箇所については、†を付した。
- (2) 以下、高倉論を参照・引用した箇所については、‡を付した。
- (3) 『スカイ・クロラ』での「カンナミ」の述懐では朝まで海に浮かんでいたというのだが、「ワニング・ムーン」では深夜に救助されている。
- (4) 「クサナギ」と「トキノ」が出会うのは『フラッタ・リンツ・ライフ』であるが、高倉氏の研究では「スピッツ・ファイア」の時間軸は『クレイドゥ・ザ・スカイ』と『スカイ・クロラ』の間だということなのでこれを採用する。
- (5) ミームについて、高倉論文では、「このミームは文化的遺産とも呼ばれ、目に見えない文化、記憶、思想などを伝播していくものである。」と説明されている。

※本文の引用は以下の各文庫により、引用に付した傍線は引用者による。

森博嗣『スカイ・クロラ』(中央公論新社、二〇〇四)

森博嗣『ナバ・テア』(中央公論新社、二〇〇五)

森博嗣『ダウン・ツ・ウン』(中央公論新社、二〇〇六)

森博嗣『フラッタ・リンツ・ライフ』(中央公論新社、二〇〇七)

森博嗣『クレイドゥ・ザ・スカイ』(中央公論新社、二〇〇八)

森博嗣『スカイ・イクリプス』(中央公論新社、二〇〇九)